

タイトル

日本鳥学会 100 周年記念「鳥類の多様性～日本の鳥類研究の歴史と成果～」

会期：2012 年 10 月 6 日（土）～12 月 9 日（日）

会場：国立科学博物館上野本館日本館 1 階企画展示室

主催：国立科学博物館

後援：日本鳥学会、山階鳥類研究所

協力：国立極地研究所、我孫子市立鳥の博物館、北海道大学植物園・博物館、熊本県文化企画課博物館プロジェクト班、東京国立博物館、一般財団法人細川流盆石、東京大学農学研究科樋口広芳教授、立教大学上田恵介教授、下坂玉起さんほか

目的：2012 年は日本鳥学会創設 100 周年となる。それを記念して日本の鳥学を歴史的に概観し、「枚举の学」として江戸時代に始まり、進化科学として発展を遂げてきた自然史学の一分野としての鳥学を追う。鳥学を通して自然史研究のおもしろさを伝えると共に、環境保全との関わりで自然史研究が重要性を増しつつあることを伝える。

展示構成：

0. 導入

カンムリツクシガモはかつて朝鮮半島とウスリー川流域に生息し、日本にも渡来していたと思われるが、既に絶滅し、世界に 3 体しか標本が残されていない。世界的には 1890 年以来雑種と考えられていたが、黒田長禮（1917）が新種として記載し、さらに江戸時代の写生図が多数見つかることによって種として世界に認められた。日本の鳥類研究の成果の代表例としてカンムリツクシガモの本剥製 2 体（山階所蔵）を展示して、その研究を紹介する。

1. 日本における鳥類研究の歴史

江戸時代から 20 世紀中ごろまでの鳥学の歴史を各時代の代表的な人物を取り上げながら順を追って見ていく。18 世紀末からの博物図譜の時代に始まり、西洋人による科学的記載や生物地理学の時代、日本人自身による亜種記載、新種記載、探検の時代を経て、分類研究がおこなわれるまでに発展する戦後に至る。

2. 分類と種多様性の研究

21 世紀のゲノム時代に入り、生物種の分子系統がかなりはっきりとわかるようになってきており、分類への反映が求められつつある。最新の系統と分類について、Hackett et al. (2008) のマルチ核遺伝子座分子系統を例に紹介する。また、DNA バーコーディングが種の分類の見直しを迫っていることを紹介する。

3. 生態研究

20 世紀後半以降、生態学・行動学の理論や科学技術の進歩によって自然史学は進化生物学に発展した。その具体例として、繁殖・渡り・採食の生態研究を解説する。進化の圧力で生み出された鳥の巧みな適応や、最新技術によって明らかになった鳥の行動を紹介する。

4. 生物多様性と保全研究

展示のまとめを兼ねて、今日の鳥類学が社会に直接に寄与できる分野である保全生物学を取り上げる。日本の絶滅鳥類の紹介をおこない現在の繁殖鳥類の多様性地形図を示して、島嶼での絶滅のしやすさと保全の必要性を述べる。また、トキやヤンバルクイナなど保全プロジェクトの代表例を紹介する。

トピック 1 年表：日本の鳥類研究の歴史—日本鳥学会の百年

トピック 2 日本鳥類目録と剥製標本

トピック 3 鳥の羽を使った日本の文化と芸術 盆石と羽箒